

挽歌

十月二十五日は亡妻すみ江の誕生日である。この日七十歳になる筈であった彼女が、平成二十五年四月二十四日に亡くなって丁度六ヶ月、定規で計ったようにきちんと月日が区切られているような具合だけれど、これは勿論偶然であろう。空間も時間もすべてが無、一切皆空の彼岸から妻は忽然と現れて、六十九年と六ヶ月の此岸の歳月を私達と共にした後、またもとの彼岸に還っていった。

「あの世」に戻った妻にとっては、現世の誕生日や年齢、ここで過ごした時間などはもはや無意味であろうが、まだ「この世」の間と空間の座標の中に漂流している私には、悲喜こもごもの出来事の記憶は、彼女と共に過ごした時間を追想するよすがとして、また私自身の生涯の区切りとして忘れられない。

いったい「あの世」といい「この世」という、何気なく使っているこの言葉で、私は何を表現したいのだろうか、二つの世界の違いはどこにあると考えているのだろうか。

一括りにして云ってしまえば「人間のからだが如何に精妙に機能したとしても、その本体は身体ではなくてこころであり、そのここ

ろが生き通しているのが、あるときはこの世、ある時はあの世であって、二つの世界には境界は無い」ということである。

人間死んでしまえばすべては終わりで、その先に何もありませんという単純素朴な考え方も勿論あり得るけれど、それは「そこに何かがあるのか、今は、判断出来ない」ということであって「あの世」の存在を積極的に否定しているのではないだろう。

昔から「あの世」の存在を否定出来ない現象は多い。しかし大抵は怪奇現象か幽霊譚として語られることが多く、そのことが何かを客観的に立証しているわけではない。



二〇一一年三月の東日本大震災のあと津波被災地では多くの怪奇現象が目撃され、報告された。私が最も注意を惹かれたのは、東北学院大学の環境社会学・災害社会学科の金菱 清ゼミナールの「震災の記録プロジェクト」であった。ゼミナールの学生が被災住民の聞き取り調査をするなかで、宮城県石巻と気仙沼のタクシードライバーの人達のいくつかの特異な幽霊体験を聞き、報告している。

タクシードライバーに限らず、運転者が幽霊を乗せた経験譚は、私は直接聞いたことはないけれど、話としては珍しくもないだろう。

しかし、朝日新聞にそういった話が載るといのは、珍しい。もつとも、東北に幽霊出現のニュースとしてでは勿論なくて、社会学の調査の結果を報告した本（呼び覚まされる霊性の震災学 新曜社）が近々出版されるという記事であった。

報告には、三十歳代女性、二十歳代男性、小学生の女の子、若い青年の四例が載っている。「幽霊」の共通点としては、六月から八月の暑いさかりなのに全員真冬の服装、行く先は全滅した沿岸部、今は更地になっているところ、気が付いたら姿が消えていること、それと年長者は居なくて若い人ばかりである。

これらの報告で、私が最も救われた気になるのは、ドライバーの反応である。例えば第一例、震災から三か月、初夏の深夜、石巻駅で乗客待ちをしていたら「ふっかふかのコートを着た三十歳くらいの女性」が乗ってきた。目的地を聞くと「南浜まで」、不審に思っ
「そこはもう殆ど更地ですけど構いませんか、どうして南浜まで？
コートは暑くないですか？」と尋ねたところ、震える声で「私は死んだのですか？」と問う、驚いて後部座席を振り向くと、そこには誰も座っていないかったという。

最初はただただ怖くて動けなかったけれど、インタビューを受け

る頃は「今では別に不思議とも思わない。震災で大勢の人が亡くなったのだから、この世に未練のある人だって居て当然なもの、今じやもう怖いとは思わない。同じように季節外れの冬服を着た人でも普通のお客さんと同じに扱おうよ」という。

他のドライバーも「幽霊」と短いながら会話を交わしていて、双方向的なコミュニケーションが短時間ながら成り立っている。それだからか、時間が経つにつれて当初の恐怖心が消えて「また同じようなことが起きたとしても、穏やかに対応出来る気がする」という。

災害の犠牲者に対する畏敬の念、その無念の思いに対する共感、ドライバーだけでなく地域の生き残った人たちにある共通の想いがそうさせるのではないだろうか。安易に「幽霊」とか「怪奇」現象などというまがまがしい表現を許さない共感があるのだと思う。

第三例目の小学生の場合、降車の際に手を貸して身体に触れたこともあって、「おじちゃんありがとう」と言って更地の闇に消えてしまったって、霊とは思われず驚きと不思議でいっぱいだったという。「もう驚かないよ、あの子、お父さんお母さんに会いに来たのだからなあ」と語るドライバーの表情はどこか悲しげで、それでいて確かに嬉しそうだったと報告にある。

何の心構えも無く不意に降りかかった自分の死に納得が出来ず、その意味では現世に未練を残した人が「幽霊」の形で生き残った人に接触しようとするのは理解できるけれど、それが何故タクシーであつたのかは実は判らない。私の貧しい想像力では、震災から数か月経っているのに、いまだにどの霊も東北の早春の服装で現れることから見れば、「あの世」では震災以来少しも時間が経っていないのではないかと思われる。つまり「時間」という次元が欠けている。それと、よほどしっかり確認しないと、あの世とこの世の境界で起きる「肉体的な死」を、突然死の場合には、自分では判らないうちに通り過ぎることもあるのではなからうか。



昔、高校で私の習った物理学では物質の最小単位である素粒子はたった三種類、電子、陽子、中性子しか無かったけれど、その後次々に新しい素粒子が発見されて二百種以上にもなり、整理の為に(?)もっと微細な六種の「クオーク」が想定されて、つい先ごろまでそれが物質の究極の粒子とされた。

現在の物理学では空間を構成しているのは極細の振動する一本の「紐」であって、直径10のマイナス33乗cm(これをプランク・スケ

ールという)、長さが10の28乗(宇宙の直径つまり百五十億光年)の紐が宇宙を構成しており、しかもこの紐は、二次元の平面であったものがチューブ状に丸められたために、この中に余分の次元の全てがたたみこまれている、この紐の振動モードの違いによって、二百余種の素粒子の全ての振舞いが説明出来るという。

一九七〇年代の量子物理学者、デビッド・ボームの「宇宙モデル」仮説では、「身の眼に見える宇宙(この世)は単独に存在するのではなく、その背後にもう一つの眼に見えない宇宙(あの世)の秩序がある」としている。つまり「あの世(暗在系)では、この世(明在系)の全ての物質、精神、時間、空間などが全体としてたたみこまれていて、分けることは出来ない構造だとしている。

現在の物理学は、プランク・スケールから外れた「場」を認識する方法を持たないために、これ以下の世界は認識不能、永遠に謎の領域というしかないらしいが、現在、同じような意味で「あの世」を不可識な、解き難い謎と観る人はむしろ減って来ている。



健康とか環境、あるいは生き甲斐といった広い意味での「いのち」についての関心が深まるにつれて、その対極にある「死」、その向

こうにある「あの世」についていろいろな分野で研究が進み、探究技術も進歩した。なかでも画期的なのは「ヘミシンク法」である。

経験的に「死」が必ずしもヒトの生命の終わりを意味するのではないとは以前から言われていたが、近年、音響学的技法を利用して脳の両半球に別々の周波数の音を聴かせ、その周波数の差に見合う脳波のパターンを変え、一種の変性意識を作る「ヘミシンク法」によって、「あの世」としか表現の仕様のない「場」と「この世」の間を簡単に往来し、その状況を報告する人が増えている。R.MonroeとかB.Moenを先駆者として、米国コロラドのMonroe研究所で七〇年代から今日までにこの方法の研修を受けた人は数千人に及ぶという。彼らはそれらの報告の中で、死によって人の意識は消滅することではなく、ただ常在する「意識の場」が移るだけだと述べている。「あの世」と呼ぶしかないその「場」には人種、民族、文化の違いを超えた階層構造（空間）はあるが、時間という概念は無くして現在、過去、未来が混じり合っているという。「プランク・スケール」より小さな尺度の空間では時間も無くなる筈なので、そのことを意味することかもしれないし、あるいは死者としてある境界を越したのではなく、帰還を予定された生者が垣間見ただけでは判らないのかもしれない。

れない。私にはその空間の有様を想像してみても、三次元だけで時間を欠いた「場」については現世の「夢」のようなものかと考えるしかない。ことがサイズの問題であつて、「あの世」が「プランク・スケール」以下のものであるとすれば、ぴったり寄り添って存在する「あの世」は、「この世」のどこにでも普遍的に存在している筈で、意識の「座」である脳は、その巨大な増幅器なのかもしれないと、これは私の妄想である。

宗教的アプローチでなく、物理学や脳科学の方法論で「あの世」を論じてすべての人を納得させることは困難で、一時流行した「臨死体験」検証も、それが死に瀕した人の幻覚、脳内現象に過ぎないという論難を振り切れないままである。

実験が不可能であるために再現性に難のあるデータが多かったのである。その点、「ヘミングク」という技法では誰が観測し、経験しようとしても全く同じ結果が得られるようだ。それによれば「この世」と「あの世」は連続しており、私達は「死」によって意識が身体から離れて（あるいは小さくなって）「あの世」に移るのは確からしい。



私は妻や早逝した次女、両親などとの「あの世」での再会がとて
も楽しみであるが、そればかりでなく、「あの世」からは「死」がど
のように見えるのかを知りたい。

(平成二八年六月二三日)